

1. 自転車を活用したインナーシティの活性化について

（北山議員）

昨年の予算特別委員会の総括質疑において、芦屋から明石にかけて自転車専用道路を整備することが、ウォーターフロントの新たな魅力向上につながり、観光振興の観点からも一挙両得になるとの指摘をしてきた。また、神戸マラソンの開催に続いて、自転車競技ツール・ド・フランスにちなんで、「ツール・ド・神戸」を開催してはどうかと提案をしてきた。当時市長はすぐにやるとは発言しなかったが、今回の企画調整局の予算を見てみると、JR貨物の神戸港駅跡地に、自転車も通れる緑道を整備し、ハーバーランドからウォーターフロントへのアクセスを良くするとのことであり、また、自転車レースについても、六甲・摩耶の活性化プロジェクトで「ツール・ド・六甲」が採択され、実現性が出てきたと考えている。これらは非常に喜ばしいことだが、ウォーターフロントや六甲・摩耶だけの目線では困る。やはり、今や大変な問題となっているインナーシティ対策としても、自転車を用いた市街地西部地域の活性化策を図っていただきたいと考えているが、この点を答弁いただきたい。

（川野企画局長）

ご指摘の兵庫区南部・長田区南部地域は、地形が比較的平坦なので、自転車を利用するというのは、良いアイデアだと考えている。兵庫運河を活かしたまちづくりや新長田周辺のまちづくりにおいても、回遊性の向上を掲げているので、これを図るためにも、自転車は一つのアイデアだと考えている。本年度の取り組みとしては、地域でアンケートやデータを集めて、来年度以降、具体的に定住人口の誘導策や昼間人口の増加策、イベントの誘致による海岸線の活性化、まちの魅力の情報発信・賑わいづくりという観点で具体策を検討していくことになっている。今ご指摘をいただいた自転車の活用も、その中でよく検討させていただきたい。

2 職員の政策創造能力の向上について

（北山議員）

私は、常々企画調整局こそが、神戸の新しい魅力を企画・創造し、まちを活性化させ、成長させていくための知恵やノウハウを結集させるべき局だと考えているが、今回の予算全般を見ても、私が常々指摘しているインナーシティの活性化一つをとっても、なかなか大胆かつ斬新で、実現性も十分見込めるような先進的なアイデアや施策が見受けられない。この要因は複数あると思われるが、長きに渡る行財政改革の結果、財源や職員のマンパワーに余裕が無くなったことや、職員に新たな施策を考える時間が無くなってしまったこと、着想のきっかけとなる機会が得にくくなっていることなどが、要因であると思われる。こう考えれば、公民連携として民間活力の導入を図ることも重要であるが、やはり政策の要は職員であり、政策を創造するためには、職員一人ひとりがどれだけ多くのアイデアの種、すなわち施策の引き出しを持っているかにかかっている。矢田市長は、常日頃から、海外都市との競争という目線で物事を発言しておられるが、私も同感であり、是非とも内に閉じこもらずに、目線を外に向けていっ

て欲しい。このことを強く申し上げたい。企画調整局の職員は、どんどん海外に視察に行き、都市の魅力向上や新たな市民サービスの種を海外から学び取り、市政に生かして欲しいと思う。極端に言えば、企画調整局の職員は一人につき、一年に一回は必ず海外に視察に行くべきと考える。そうすれば、企画調整局は憧れの部署となり、行きたいという職員も増え、モチベーションの高い職員が集まることで、結果新たな政策が創造されるという好循環が生まれるのではないか。見解を伺いたい。

(川野企画局長)

企画調整局が色々な市政の企画を生み出していく中で、不十分な点があるというご指摘であり、一つ一つ肝に銘じているところである。ご指摘の海外の視察という点では、勿論一人年に一回とまではいかないが、これまでも医療産業都市推進本部やデザイン都市推進室において、海外の先進事例を学ぶというスタンスで実施している。先ほどの民主党の質問の中であった海外のLRTについても、局内で実際に訪れて実物を見た者がおらず、これでは議論にならないなと感じたところなので、具体のテーマがあり、その視察に効果が認められるのであれば、海外出張についても積極的に取り組んでいきたい。ただし、予算の話もあるので、一人年に一回とまではいかないが、行財政局とも協議して検討していきたい。

(北山議員)

企画調整局の職員に年に一回は海外へ行って、十分に情報を仕入れて来てもらうという点について、局長の答弁は少々生ぬるいと感じている。例えば今、医療産業都市について議論をすると、普通の医者ではまず三木本部長に勝てないだろう。これは、三木本部長が海外の事例などを良く見て勉強してきているからだと思う。私は、企画調整局の職員が海外で学んだことは、神戸の施策に必ず効果として返ってくるものと考えている。LRTの話なら、日本でも富山にあるものも視察すればよいし、海外のLRTも視察して来ればよい。そしてどちらの事例を参考にするのが良いのかを考えるべきだと思う。企画調整局の職員になることが神戸市の職員になる際の夢だったと言われるくらいの局になって欲しいと思っているのだが、再度見解を伺いたい。

(川野企画局長)

企画調整局に大きな期待を寄せていただき、ありがたく思う。アイデアを生むという点では、職員が国内外を問わず色々な先進事例を目の当たりにして、分析してみるというのは重要なことだと考えている。出来るだけそのような機会を増やせるように頑張ってみたいと考えている。

(北山議員)

今、国でも地方でも職員の数や、給与・ボーナスを減らせと言う人が多くいるが、これは間違いである。民営化できるものは民営化した上で、職員の数を減らすのはよい。しかし私は、神戸市の職員には一職員として期待されるレベルの仕事をしっかりやらしてもらわなければならないと考えている。予算などの忙しい時期には、皆その日の内に帰れているのか。そうではないと認識している。職員は頑張っている。一層頑張るためにも、職員の数を増やして欲しいと思う。